IS ～無限の成層圏に輝く暁の夏と奇跡の翼～

Giotto27

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

偉大な姉と天才の弟と比べられ周りからも押しつぶされていた少年、織斑一夏。

彼はとある誘拐事件を機に世界を超え、青の世界ー「地球」の青蘭島にたどり着く。

そこで彼は自分に自信が持てない片翼の天使と出会う……

目次

Prolong

Prologue1 ―― 1

Prologue2 ―― 5

Prologue3 ―― 9

Ｐｒｏｌｏｎｇ
Ｐｒｏｌｏｇｕｅｌ

「クッソ！　どうなってやがんだよ!?」
「なんで織斑千冬が出場してるのよ！　脅迫状はちゃんと送ったんでしょうね!?」
とある廃墟の一角で男女数人の激しい怒声が響く。
その声に手を後ろ手に回され両手両足を拘束されている少年――織斑一夏は意識を一度そちらに向けてまた顔を伏せた。その表情は諦めと絶望、そしてどこか納得したかのような色を帯びていた。

いつからだろう、まともに名前を呼ばれなくなったのは。
誘拐犯達の怒声を聞きながらそんなことを考えてしまう。
両親に捨てられてから年の離れた姉が俺と双子の兄・春十を養うために頑張り始めた。周りからよく『お姉さんを見習って頑張りなさい』などと言われた。それまではまだよかったが一気に歪んでいったのは、あのころからだ。
『インフィニット・ストラトス』――通称ＩＳ。姉の友人である篠ノ之束が宇宙空間での活動を想定して開発したマルチフォーム・スーツ。発表された当初は全く相手にされていなかったが、謎のハッキングにより日本に向けて発射された２３１４発以上のミサイルを搭乗者不明のＩＳ《白騎士》が迎撃。さらに《白騎士》捕獲のために送り込んだ戦闘機及び戦闘艦を瞬く間に無力化した事で評価が一転した。
そして当初の目的、宇宙進出から軍事進出へと変わっていった。しかし、ＩＳには女性しか乗れないという欠陥がありそれにより女尊男

卑の風潮が広まっていった。
そんな中優秀なＩＳ乗りとして活躍する姉を持てばどうなるか――結果は周囲の期待の加速だった。
加えて兄がやればなんでもできてしまういわゆる天才であることも期待を加速させた。
だが、凡人であった俺にはその期待に応えることができなかった。努力こそしたがそれは２人に一歩届かない成果。
――『なんで織斑千冬の弟がこんなこともできないんだ？』
――『織斑千冬の弟ならこれぐらいできて当然だ』
――『なんで双子の兄はできて弟にはできないんだ？』
次第にそんなことを言われて努力を否定された。結果が良いものでも悪いものでも周りの評価は同じ。寧ろ良い結果を出せば最初の頃は結果が芳しくなかっただけにズルをしたんじゃないかと　罵倒され暴力を振るわれることさえあった。
気付けば、本当に仲の良い極少数の友人を除いて俺の名前を呼ばなくなっていた。
『出来損ない』
『織斑の恥』
『織斑千冬の付属品』
そんな風に呼ばれた。
そんな日々に姉は気付かず話をしようにも『今は忙しい』と取り合ってくれない。
それでいて『お前達２人は私が守る』などと言ってくるのだ。ちゃんと見てくれないのに。それでもいつか、もしかしたら、気付いてくれるのでは、そんなことを思いつつ努力を続けた。
だが、現実はそれをゆるしてくれなかった。
姉が出場する第２回『モンド・グロッソ』――ＩＳ世界大会に親族応援という形で兄共々招待されていた俺は、
その決勝戦当日に誘拐された。どうやら犯人達の会話から『織斑千冬の決勝戦出場阻止』のようだが……怒号が響いたのを考えるにどうやら失敗したようだ。

（結局、家族よりも名誉を選ぶのかよ、守るなんて言葉も口先だけのものじゃないか……）
だからこの結末も思うことなんてなにもない……

「チッ！　どうする依頼人のねーちゃん達よぉ!?」
「どうするって……私達の顔を見られてるから放置するわけにもいかないし……」
「殺すしかないでしょ」
そう言ってＩＳを纏った女性が１人、銃口を突きつける。
「恨むなら、助けに来なかった、貴方の姉を恨みなさい」
（ようやく……あの日々から解放されるのか）
一夏は死の恐怖よりも苦しみから解放されることに安堵していたが、その顔を眺めていた女性は眉をひそめた。
「やけに静かねアンタ……まぁ、騒がないでくれるならこちらもありがたいけど」
一夏は引き金に指がかけられたのを見て、そっと目を閉じその瞬間を待つ。
だが
バギン！
銃撃音とは違う何かが罅割れる音に思わず目を開く。
すると誘拐犯達も自分達の後方に視線を向けている。その先では景色の一部に罅が入っている。
そしてー
一際大きな音を立てて景色が崩れた。それは大きな亀裂となり……周りのものを吸い寄せ始めた。
「クソ！　なんだよあれ!?」

「知るかよそんなもん！」
「ちょっと置いていかないで！」
その場の全員が逃げ惑うが、なす術なく亀裂に吸い寄せられ？み込まれていく。そして拘束され抵抗ができない一夏も吸い寄せられていく。
そして
「う、うぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
亀裂に呑み込まれる。
こうして織斑一夏はこの世界から消えた。

Prologue2

――ある日、世界は〝連結〟した――

突如として開いた《門(ハイロウ)》後に《世界接続(ワールド・コネクト)》と呼ばれるその出来事によって繋がった異なる世界

――青の世界『地球』

――黒の世界『ダークネス・エンブレイス』

――赤の世界『テラ・ルビリ・アウロラ』

――白の世界『システム＝ホワイト＝エグマ』

その影響によって様々な『異能(エクシード)』に目覚めた少女達『プログレス』

そして『プログレス』達を『リンク』という特殊な力で強化する力を持つ存在『α(アルファ)ドライバー』

そして世界各地で起こり始めた超常現象などの『異変』

事態を重く見た４世界は手を組み、世界を救うカギであろう『異能(エクシード)』少女達『プログレス』と彼女たちよりも圧倒的に数が少なく稀少な存在である『α(アルファ)ドライバー』たちの保護と教育に励むこととなった。

青の世界『地球』――東京都に属する太平洋上の島『青蘭島』

青蘭学園という巨大な学園及びその周辺に広がる研究・学術機関が集まる学園都市の総称。

青蘭島はその学園を中心に発展しており、建設には他世界の技術も使われており島外よりも少し進んだテクノロジーで運営されている。島内には大型ショッピングモール施設やそのほか娯楽施設も存在しており、その気になれば青蘭島から一生外に出なくても生活できるほどに施設が充実している。

そんな学園内の比較的自然の多い一角で赤の世界出身の天使――レミエルがひどく落ち込んでいた。

「う、うぅ……またランク、上がれませんでした…」

自己嫌悪とともに表情が暗く染まる。天使でありながら生まれつき片翼であるが故に空を飛ぶことができず、自分で自分に落ちこぼれの烙印を押してしまっていて自信が持てない。そのために土壇場で気が引けてしまうところがあった。
(アウロラさんとソフィーナさんはRクラス、美海さんとセニアさんはUCクラス、なのに……私はCクラス…)
プログレスは『異能(エクシード)』の出力の大きさやその制御力などを総合してEX(エクストラリベリオン) R クラス、S(スペリオルリベリオン) R クラス、R(リベリオン) クラス、U(アーククレイドル) C クラス、C(クレイドル) クラスにランク付けされるが、レミエルはクラスアップのチャンスに失敗していた。
思考がどんどん暗くなっていき涙すらにじんでいたそのとき
ドッガァァァァァァァン!!!
――腹の底から響くような轟音と爆風が彼女を襲う。
「な、ななななな!?」
思わずひっくり返るレミエルだったが足元から聞こえた呻き声に気付く。そちらを見ると傷だらけの少年が一人地面に倒れ伏しているのを見つける。慌てて駆け寄り、声をかけるが芳しい反応が返ってこない。
(ど、どどどどうしましょう!?とりあえず誰かに連絡…それともこの人を先に保健室に…)
思考がグルグルと回り混乱していくが、状況はレミエルを待たずに進んでいく。
「クソ、何が起きたんだよ!?」
「知らないわよそんなの!」
土煙の中から一夏を攫った誘拐犯達が出てくる。レミエルが意識を向けると同時に、誘拐犯達もレミエルに意識を向ける。
「何だあの女?」
「背中の翼…それも片方だけ」
「どうでもいいわそんなこと。そこの女とあのガキ捕まえるわよ!
……それにあの女が何だろうと片翼じゃいきなり空を飛び回る、なんてことはしてこないでしょ」

「!!」
偶然にではあるが自身のコンプレックスをつかれて硬直するレミエル。そんな彼女にＩＳを纏った女性が近づき　手を伸ばそうする。
瞬間
「ウインドスラッシュ！」
掛け声と共に強烈な風が吹き荒れＩＳを吹き飛ばす。
「レミエルちゃん大丈夫…ってあれ、その男の子は？」
「美海さん!?　どうして、ここに…」
レミエルは自分のピンチを救ってくれた栗色の髪をツインテールに結った少女――日向美海に問いかける。
「えっとー実はね…」
「ちょっと美海！　先走らないでよ！」
後から小柄な体に淡い紫色の髪を美海よりも高い位置で結ったツインテールに濃い紫色のドレスを着た少女――ソフィーナが駆けてくる。
「あははーごめんね？」
「まったく…ほんとせっかちなんだら」
ポカーンとしている周りの者達を置き去りにして会話する二人。そこにまた同じ方向から二人の少女と一人の少年が合流した。
「ソフィーナさんもせっかちです。美海さんの後にすぐ行ってしまいました」
「ふふふ、みんなせっかちね～」
「セニアもアウロラもうるさいわよ！　ほら裕也も何か言ってやりなさいよ！」
ソフィーナ同様小柄な体に綺麗な白い髪と変化の乏しい表情をした少女――セニアと、濃い桃色のゆるやかな髪と豊かな胸を持つスタイルの良い身体付きのおっとりとした雰囲気の少女――アウロラの言葉に騒ぐ声が大きくなっていく。
「いや、事実だろ？　このメンバーで集まるといつもみんな騒いでるし」
「ちょっ！　裕也までそういうこと言うの!?」

「あ、あの…皆さんどうしてここに？　ここは一応人通りの少ない場所のはずなんですが…」
　控えめに発したレミエルの質問に答えたのは『裕也』と呼ばれた少年だった。
「この辺一応第2風紀委員の巡回範囲なんだよ。普段はここまで深く来ないけど。それで、近くを回ってたら偶々この辺りを散歩していた美海たちとバッタリ会って、軽く話してたら凄い音がしたからここまで来たんだ…っと、みんな和むのはいいけど少し後にしてくれ。向こうはどうも穏やかじゃなさそうだから」
　平均より少し高い身長の黒髪黒目の少年――柊裕也の声に周りに意識を向ける4人。
　確かに周りの男女は明らかに敵意を向けている。
「とりあえずここを切り抜けよう。みんな、頼むぞ！」
『了解！』
　少女たちの声と同時に蚊帳の外にいた誘拐犯たちは怒号を上げながら向かってきた。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ３

「う、うう……」
　周りの喧騒によって一夏は目を覚ました。
（一体…何が……）
　目の前で起こっていることを意識が覚醒したと同時に驚愕する。
　少女たちが手から風や炎を出していることもそうだが、なによりは（生身でＩＳを圧倒している!?）
　銃弾を弾き、迫る刃を防ぎ、ときには押し返し反撃すら決めてみせるその光景は一夏の中にある『ＩＳはＩＳでしか倒せない』という概念を覆すものだった。
　気がつけば誘拐犯たちは次々と無力化されていき、ＩＳ２体を残すのみとなっていた。
「だ、大丈夫ですか!?　しっかりしてください！」
　とそこで一夏は自分に向けて声を掛けられていることに気が付く。返事をしようとそちらに視線を向けて――一夏の思考は固まった。
「て、天使？」
「え、あ、はい。天使ですけど……」
　当たり前のように返されたレミエルからの返答に再度思考が固まりかける一夏だったが、それは怒号によって阻まれる。
「なんなのよこいつら！」
「なんでＩＳの攻撃が通じないのよ！」
　ＩＳを纏った２人が業を煮やしたようだった。
「あのガキの…あのガキのせいで…あのガキがあぁぁぁぁぁぁ!!」
　突如、ＩＳ２体が目の前の美海とソフィーナから標的を変え一夏に向かって突撃した。
「！　まずい、止めてくれ！」
「了解」
「わかりました」
　突然のことに焦り、裕也の判断が少し鈍る。
　咄嗟に出した指示によりセニアのレーザーとアウロラの障壁によ

り1体は止められたが、もう1体は構わず一夏とレミエルに迫りその手に持つ剣を振りかぶる。
「こんのぉぉおおお！」
「!!」
「こ、こないでください！」
恐怖で硬直した一夏を庇うようにその身を抱き寄せ覆いかぶさるレミエル。その拍子にお互いの手が触れた瞬間
ズォオオオオ!!
と、レミエルの翼の無い左肩から強い光が放たれ、振り下ろされた剣を押し返しＩＳごと吹き飛ばす。
光の奔流は止まることなく放たれ続け、やがて翼の形へと変わっていく。
「この光って異能（エクシード）だよね？」
「じゃあ、あの倒れているヤツもαドライバーってこと？」
美海とソフィーナがそれぞれ推測をする中でレミエルは溢れ続ける光とそれによって形作られた光の翼を見続けていた。夢にまで見た双翼が自身の背にあるからだ。
（これが……私の可能性、なんですか？）
「ああもう、なんなのよ！」
呆けていたレミエルだが、金切り声のした方を向くと先ほど吹き飛ばされた女性が憤怒の形相で睨み付けていた。
「や、やめてください！　もうこんなこと……」
「うるさい！　一体何なのよ!?　こんな……こんな……」
スラスターを一気に点火して全力の突撃。標的は――レミエル
「あああああぁぁぁぁあああああ!!」
狂気とも錯乱ともとれるような声が響く。ＩＳの持つ剣が迫るなか、レミエルは一夏に話しかける。その瞳にはいつもの諦めの色は映っていなかった。
「お願いします。もう少しだけ力を貸してください！」
一夏の手を握り決意を固める。
溢れ出る光の出力が増し、翼の輝きが強くなる。

（この人と一緒ならきっと！）
「エクシード・リンク〈白き刃の奇跡〉！」
レミエルの光の翼とＩＳの持つ剣が衝突し火花を散らす。
一瞬の鍔迫り合い。
だがＩＳの持つ剣に罅が入り、数秒もしないうちに砕け散り、レミエルの翼が直撃する。
「が、ぁぁぁぁぁぁ!?」
そのまま再度吹き飛び地面に叩きつけられ気絶し、ＩＳが解除される。
「はぁ……はぁ……おわり、ましたか……？」
「レミエルちゃーん！」
「ひゃあ！　美海さん!?」
「すごいよさっきの！　あんなに強い出力で異能（エクシード）使えるなんて！」
息を整えていたレミエルに飛びつき笑顔で褒め倒す美海。
他のみんなも賞賛の言葉を送っている。
そんな中
（いったい……何が……）
最後まで状況が飲み込めず呆けていた一夏は、出血と目の前からＩＳ（命の危機）が去った安堵感で再び気を失った。

「う、うぅ……此処は……？」
次に目覚めたとき、一夏は全身のいたるところに包帯を巻かれ病室着を着せられた状態でベッドに寝かされていた。
清潔感を感じさせる白一色の塗装と、ツンと鼻をつくような消毒液独特のニオイから医療関係に使う部屋だと分かる。

「あ、起きたか？」
　その声と同時に一夏のことを黒髪黒目の少年が覗き込んできた。身長や雰囲気から自分より年上だろうと一夏は判断する。
「あの、此処は？」
「保健室。あ、まだ寝てていいぞ。傷自体は治りかけているけど、体の疲労や痛みは消えてないだろうから」
　言われて体のあちこちが軋むような感覚を覚えて再びベッドに沈み込んだ。
「目覚めてすぐで悪いけど、なんであんなことになってたのか話を聞かせてほしい。
　とりあえず、名前聞かせてもらえる？」
「はい……織斑一夏です」
「織斑君……か」
　無難に名字で呼ばれたが、一夏は混乱し、状況が飲み込めていなかったためか、呼ばれ方に対して変な意地をはっていた。
「あの……できれば名前で呼んでください……名字で呼ばれるのきらいなので」
　黒髪黒目の少年が一瞬怪訝な顔をしたが何かを察した表情になって頷いた。
「わかった。じゃあ名前で呼ぶよ。
　俺は柊裕也。俺のことも呼ぶときは名前でいいから」
「裕也さん……」
「それでいいよ。じゃあ改めて話を聞かせてくれ」
　そこから一夏はすべてを話した。姉の織斑千冬が出場する第二回モンド・グロッソ観戦のために半ば無理矢理連れて行かれたこと、その決勝戦当日に誘拐されたこと、姉にも政府にも見捨てられたこと、そして、誘拐犯たちに殺されそうになったところ、青白い亀裂に呑み込まれて気がついたらあの場所にいたこと。
　それを聞いた裕也は戸惑った表情を見せたが、咳払いをして真剣な表情で話し始めた。
「落ち着いて聞いてほしい。まず、今の話に出てきた『ＩＳ』とか『モ

ンド・グロッソ』とかいうのは存在していない」
「え？」
「それからこの写真を見てほしい」
　手渡されたのは一枚の上空を写した写真。ただし、そこには青空のほかに赤、紫、黄、の輝きを放つ光が浮かんでいる。
「この光が何か、わかる？」
「いえ…わかりません……」
　突然見せられたものを理解できずに混乱する一夏だったが、裕也はその様子を見てどこか納得していた。
「あ、あの此処はどこですか？　それにさっきのＩＳが存在していないってどういうことですか？」
「落ち着いてくれ、ちゃんと説明するから――――」
「ほら、コソコソしてないで入るわよ！」
　裕也が口を開こうとしたとき廊下から騒がしい声が響く。
「え、で、でも……」
「大丈夫よ、お見舞いくらいで裕也さんは怒ったりしないわ」
「早く入りましょう。いつまでもここで騒いでいたら迷惑です」
「ほら、いこ！　レミエルちゃん」
「ひゃあ！」
　バタバタと入室してくる五人の少女たち。ここが本当の病院だったら咎められていただろう。
「あ、起きたんだ！　私は日向美海、よろしくね！」
「理深き黒魔女ソフィーナよ」
「コードΩ４６セニアです」
「アウロラです。よろしくお願いしますね」
「れ、レミエル、です…よろしくお願いします……」
　次々と自己紹介をする少女たち。場所を考えれば少し元気が良すぎるだろう。
「みんな少し落ち着いてくれ。次々に喋られたら混乱するだろ？」
「あ、ははーごめんね？」
「あ、あの！」

声を上げた一夏に視線が集中する。一度に視線が集まりビクつくが疑問を発せずにはいられなかった。
「さっき助けてくれた人たちですよね……ありがとうございます。でも、あのときの手から風や炎を出したり、光の翼はなんだったんですか？
それに……その頭の角や背中の翼は作り物じゃないですよね？いったいどういう……？」
「それも含めて説明するよ。まず――――」
そこから一夏はこの世界の事情について教えられた。
青の世界、黒の世界、赤の世界、白の世界の４つが繋がり、世界各地で異変が起きていること。
異能（エクシード）という力を宿した存在プログレスとそれを支える存在αドライバーがいること。
今いる場所が青の世界―地球の青蘭島であり、四世界から集まったプログレスとαドライバーの育成のための教育機関であること。
ウロボロスという異変の原因と考えられる存在が青蘭島を狙ってくるため撃退していること。
「以上が大体の世界事情で、さっきの一夏の話と合わせると、ここは一夏にとって異世界ということになる」
「異世界、ですか……話をしているうちにそんな気はしていましたが……」
話をしていると徐々に一夏の顔が俯き始めたのを見て裕也が慌ててフォローに入る。
「ご、ごめん。やっぱりきついよな、いきなり異世界に来たとか言われてしかも帰る方法が分からないなんて」
「い、いえ、それについては別に良いんです……寧ろ、これでよかったかもって」
一夏の言葉に頭に疑問符を浮かべる一同だが、次の言葉で表情が険しくなる。
「俺……前の世界では優秀な姉と兄に比べられて出来損ないって蔑まれていたんです。名前もまともに呼ばれなくて、生きているのに死ん

でいるのと変わらなくて……だからあの世界と決別できてよかったなーなんて……」
　言葉を紡ぐにつれて表情が暗く寂しいものに変わっていく。まるで、今までどれだけの悪意を受けてきたかを物語っているように。
「そっか……なら青蘭学園に入らないか？」
「え？」
「いくらこっちで生きることを決めたからって身寄り無しじゃ苦労するだろうし。
　それに学園に入れば補助も受けられるから生活していくのに便利だぞ？」
「ちょ、ちょっと待ってください！　さっきの話から考えるとこの学園はプログレスかαドライバーしか入れないんですよね？　俺はどっちでもないのに」
　当然の疑問を口にするが裕也は否、と答える。
「いや、さっきの戦闘で一夏がαドライバーだということは確認している。憶えてないか？」
「俺がαドライバー……？」
　自分がαドライバーだと自覚できないせいか困惑する一夏。そこに遠慮気味に声がかかる。
「あ、あの……憶えてないですか？　あのとき……斬られそうになったとき私の手を握って力を貸してくれたことを……」
「え、えっと……そういえばなんだか不思議な感覚があったような」
　レミエルに言われて一夏は朧げながらも自分に何があったか思い出す。
「あのとき、わたし今までで一番強く繋がりを感じたんです。だからその……青蘭学園に入ってくれたら、力を貸してくれたら嬉しいなって……だからあの、えっと……」
　レミエルは必死に何かを伝えようとしているが言葉尻が小さくなっていく。
「じゃあ…ここに入れてもらってもいい……ですか？」

困惑しながらも答えた一夏にみんな笑顔で迎え入れる。

このとき、これが後に起こる騒動の始まりだったとまだ誰も知る由もなかった。